

# 土曜 ライフ・楽しむ

## 目の当たりにした「医は仁術」

# わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利



「ドーン」と大きな音がしました。慌てて振り返ると若者が仰向けに倒れています。

ある年、とあるイタリアンレストランで開いた忘年会のことです。今のコロナ禍ではついでごぶさたの宴会ですが、あのころは何かと理由をつけて親しい人たちとよく飲み会を開いたものです。

すぐさま私の隣にいた医師である友人が駆け寄り、血で汚れるのもいとわず、ひざまずいて呼吸を確認し、脈をとったり、呼びかけます。若者の顔色はとても悪く、倒れたとき頭を傷つけたようで結構な量の血を流しています。

また看護師さんも続きました。彼女はすぐさま人工呼吸のために身構え、若者の手をさすりながら声をかけます。仲間の一人は消防の人で、119番に通報し的確に状況を説明しています。少しずつ若者の意識が戻ってきました。

「医は仁術」という言葉を聞きますが、とっさに見知らぬ人の苦難に対処できる彼らに頭が下がりました。3人の仕事ぶりは手際がよく、プロとして安心できるなんとも頼もしいチームです。

後で聞くと、救急患者に慣れている医師でも院外での応急処置は緊張するらしく、看護師がそばにいてくれて助かったと言います。若者はチー

難だったようで、大事には至らず何よりでした。

今、医療関係者が自らも感染のリスクを背負うなど大変な思いをして働いています。そんな中、ワクチンの副反応にためらう人々の不安をおおり、高額なセミナーを開き、怪しい書籍や商品の販売を企てる輩の中心に医師免許を持った人がいるという話も聞かえてきます。

「医は仁術」という言葉を忘れてしまったのでしょうか。火事場泥棒といつか、これも悪徳商法の一つと言っても過言ではないと思います。延長が繰り返されたせいか、緊急事態宣言下にもかかわらず

わらず少し緩んできたようで、マスクをしていない人も目立ちます。私たち一人ひとりができる限りの対策をしなければと改めて思います。いつまで続くか不明ですが、もう少し頑張りましょう。

ところで「そのときお前は何をしていったんだ？」とお思いでしょうが、私なりにやるべきことを見つけました。お店の人へ状況を説明し、ざわつく他の来店客や一番奥の席でこの事態に気づいていなかった若者の仲間に、「この3人はプロなので安心してほしい」と伝えることで、その場の混乱を少しは和らげることができたと思います。

改めてこんな友人がいる幸せに、彼らと一緒になら「飲み過ぎて安心だな」と感謝したものです。



「落日」  
太田秀樹さん(伊達市)

全日写連